

石井脩三『歩兵運動規範』の解説

石井修三子孫・相原修氏提供資料

歩兵運動規範の解説

我が国の近代化を推進した歴史的名著

翻訳蘭書 歩兵運動規範 について

歩兵運動規範（全三編七巻） 葦山 石井修三譯述・仙台 大槻崇二校閲

この書物は 歩兵「運動規範」であり 日本人の身体の行動を西洋方式に改めた源となつた書物です。この書物は江川坦庵公が幕府洋式調練の指導書として葦山属生石井修三に蘭書翻訳を命じたものです。

原書はプロシア Brandt 兵書をオランダ語に転訳された歩兵教練書であり、

石井による翻訳は安政二年（一八五五）、長崎海軍伝習所留学前であり、江戸縄武館の蔵板印刷は安政四年（一八五七）、長崎留学帰朝後の秋 石井歿年生涯最後の仕事です。

安政二年（一八五五）同六年 長崎海軍伝習所に於いてオランダ洋式調練教育が行はれた。

それを経て安政六年（一八五九）長州藩は歩兵運動規範（全三編七巻）・散兵教練書（一篇・付録二編）を藩校博習堂に導入しオランダ教官の指導を加味し慶応二年（一八六六）再び蔵板印刷し、高杉晋作により奇兵隊に、大村益次郎により討幕官軍に、山県有朋により近代兵制に活用され明治維新をへて我が国の近代化に大きく貢献している書物である。

歩兵運動規範

原書はプロシア Brandt 兵書をオランダ語に転訳された歩兵教練書です。

Reglement op de exercitien en manoeuvres van de infanterie（一八五五）

○第一篇 生兵教練篇一卷 ○第二編 小隊教練篇二卷 ○第三編 大隊教練篇四卷

○安政二年（一八五五）石井修三翻訳 安政四年（一八五七）江戸縄武館蔵板・著書調所改

○安政六年（一八五九）長州藩 博習堂長門練兵場添削改定 慶応二年（一八六六）蔵板四部冊

長州藩は洋式兵学研究教育機関「博習堂」の設立に当たって生兵教練、小隊教練、大隊教練、

散兵演式、散兵定則の四編八巻の翻訳書とその原書（蘭文）四冊を購入し、博習堂に下げ渡した。

安政六年九月（一八五九年）「翻訳書の内容に若干の誤謬疎漏等之有候は添削し」と書かれてゐる。

○第一篇 生兵教練書一卷 ○第二編 小隊教練書二卷 ○第三編 大隊教練書四卷

○第四篇 散兵教練書一卷・附録二編 散兵畧解 合圖鼓譜

原典 散兵演式（島村鼎訳）散兵定則（安場敬明訳） Voor schrift op het tirilleveren, unitgegeeven po last van het department van oorlog,（一八五七）Brant 教練書

これらの書物は当時のヨーロッパ（プロシヤ）の最も斬新で優れた兵書を蘭語に重訳されたものであり、近代のヨーロッパでは軍事と教育は表と裏の関係にあり、この翻訳書はわが国の軍制、教育制度、学校体育に大きく影響していることは明確です。

この翻訳原本が代官江川家にあると言う確証が得られれば垣庵公の近代化への治績としては現在知られている事柄を凌駕するでしょう、今後の研究課題ですね」(静大湯の上教授の意見)

注(文化庁総合調査によって蕨山江川文庫内に蘭語原典及び石井翻訳本第二篇、手書き号令書の所在が確認された)

歩兵運動軌範の要点

旧日本陸軍の編成はほぼこれを原型として大村益次郎、山県有朋によって軍制改革が実施され、これに伴いその指導者養成も富国強兵の戦前の教育制度(初等、中等、高等、軍学校)を大きく支えていることは確実です。

第一編 生兵教練書

甲、歩兵軍の区分と編成・日本陸軍の軍事編成はほぼこの通り実践されている

乙、初年兵(生兵)の教育訓練。

伍(班)単位の兵卒(初等教育修了者)を対象とした教育訓練、

下士官の養成教育内容・号令用語(旧制中等学校での軍事教練)

第二編 小隊教練篇 (二巻 図解戦術)

小隊、分隊、中隊(五〇名〜一五〇名程度の編成)での指揮官養成の教育訓練。

(中等・高等教育修了者を対象に軍指揮官の養成教育として内容)

第三編 大隊教練篇 (四巻) (五〇〇名〜二〇〇〇名以上の軍編成での軍事行動及び

その指揮官(軍学校終了者)を対象とした教育訓練。

第四編 散兵教練書

実戦に即応した散兵演習(ゲリラ的)・散兵戦術の図解及び号音。

銃槍術の実践訓練(敵を殺さなければ自分が殺されると言う軍人精神の訓練と教育)

「跳ぶ」「走る」「駆ける」の体育スポーツ基本指導等。

付録二編 散兵畧解 実戦での戦術図解、(四八図解)

散兵合図鼓譜 集合、進軍、退軍等 太鼓(笛)による。

歩兵運動軌範の歴史的価値とその果たした役割

「幕末期長州藩洋学史の研究」福岡教育大学小川亜弥子先生の論文より

一 この書物は江戸繩武館(大小砲操練所)から更に幕府講武所の洋式教練書として用いられ

ほぼ全国諸藩に広く活用された。「蕃書調所改」即ち公式検定教練書

この書物は特に仙台藩漢学者大槻盤溪(藩校養賢堂学頭、戊辰戦争東北一六藩の名主参謀)校閲によつて号令用語を始め文章も翻訳調から日本語の公式用語で完結されている。

二 長州藩兵学校博習堂は長州藩医坪井信道、蘭学者東条英庵、長州藩士周布政之助、高杉晋作、桂小五郎、白井章介(奇兵隊軍監)、松島剛蔵(瑞益)、久坂玄瑞、村田蔵六らが深く関わっている。

その他松下村塾門下生も多く入塾している。伊藤俊介（博文）も洋式調練を学んでいる。

三 博習堂の総括責任者松島剛蔵は後にイギリス船攻撃や禁門の変に敗れ、幕府への恭順を示した藩政府保守派によって斬首の刑に処せられた（元治元年・一八六四）。

それに反発した高杉、桂らが奇兵隊として決起し保守派政権を倒し、再び村田蔵六（大村益次郎）を総括責任者として博習堂を再興し洋式銃操調練が始まった。（元治元年・一八六四）

四 オランダ海軍は全てが海兵隊であり再興した博習堂は長崎海軍伝習所でオランダ教官から実戦的に叩き込まれた長崎伝習生を指導者として、翻訳教本を使用する訳本主義に徹し、洋式調練の指揮官養成としてその学習と調練を集中的に進めている。

このために長州歩兵教練書は長門練兵場で蔵板印刷され教本として使用されている。

五 長州藩の軍事最高責任者、大村益次郎は軍制改革を断行し、長州陸海軍とも藩を挙げて洋式銃操調練を各地で強力に推進している。

特に大村益次郎は散兵戦術に長けており、指揮官養成のために散兵戦術、築城等の戦略教育を徹底し、指揮官の隅々にまで浸透させ、この戦術と近代兵器が長州陸軍が対幕戦争に勝利した理由である。この散兵戦術の戦いぶりは幕府軍として長州藩と対戦した福山藩の記録にも残っている。

六 歩兵運動軌範は明治維新後の軍制改革、学校教育の推進力として大きく寄与している。新政府にとつては歴史的な書物であり長州藩資料として高く評価され、それが石井修三の業績が今日までも生き続けている理由である。

歩兵運動軌範 史料の存在

蔵板印刷本・写本を含め長州藩、仙台伊達学書、佐賀鍋島家、越前藩、江戸縄武館（葦山）等で使用された物が全国各地の図書館、大学に所蔵されているが縄武館本は生兵教練書のみ未発見、全巻揃っている所は無い。全巻（コピー）揃って収集されたのは明治以降今回の研究が初めてであろう。

一 山口県立山口図書館（長州藩）長門練兵場蔵板（慶応二年） 四冊（生兵教練書、

小隊教練書、大隊教練書、散兵教練書 附録 散兵暑解、散兵合圖鼓譜 合本

二 福井市立図書館（縄武館） 第二編二巻、第三編四巻、計六冊 安政二年版

同 第二編二巻、第三編四巻 安政五年大谷徳太郎 写本

「歩兵運動軌範」図稿 四冊 同 写本

同上 第二編二巻 第三編四巻 六冊

三 玉川大学図書館（縄武館） 一卷存一冊 第三編二〜四 存二冊

- 四 佐賀大学図書館(縄武館) 小城鍋島 安政四年版 欠本 存三冊
五 慶応義塾大学図書館(蕃書調改) 安政四年版 第三篇 一、四卷 四冊
六 静嘉(上に同じ) 第三編四卷 一冊
七 旧彰考 三冊(欠一冊)
八 仙台藩伊達家(縄武館) 四冊 第三編四卷増補一卷 四冊
九 学書言志 第二編二卷 二冊

- 一〇 蕪山江川文庫(蕃書調所改第二編二卷(小隊教練)二冊、同蘭書一冊(目錄記載なし))
一一 同 歩操新式・歩兵練法(手書き) 文久三年(一八六三) 紀元一千八百六十一年式宇野氏
生兵教練号令 小隊教練号令 生兵教練書、小隊教練書の号令のみ抜粋したもの

『古典籍総合目録』国文学研究資料館編 第二卷一九九〇年 p.三五五 岩波書店

『図書総目録』 第七卷一九七〇年 p.三六三 岩波書店 但し一〇・一一の江川文庫のみ記載なし、

長崎海軍伝習所は西洋の知識・技術を組織的に西洋人から直接学んだわが国最初の学校であつたが、この時この書物は既に石井によつて翻訳されており、オランダ海軍の海兵隊訓練はこの書物の実践であつた。この書物を最も有効に実戦活用したのは長州奇兵隊であつた。長州藩に導入した人物は江戸日習堂で蘭学を、長崎海軍伝習所で海軍を石井と共に学んだ松島剛蔵(弟は吉田松陰の妹婿)であり、高杉晋作、大村益次郎によつて奇兵隊に、山県有朋によつて新政府官軍にとり入れられている。

現在に生き続ける不朽の名著 歩兵運動軌範

この書物は明治新政府の軍制改革(歩兵操典の原典)、学校教育の推進力としてわが国の近代化に大きく寄与しており、今日も尚様々な分野で広く活用されている。

○学校教育・スポーツ指導に

古来わが国の庶民教育は「読み・書き・算盤」であつたが西洋流の「体育」が学校教育に取り入れられたのは安政の時代石井の書物とオランダ海軍によつて長州藩兵学校の博習堂に導入された洋式訓練が源流となつている。

号令に伴う体の動きや行動、教師の指導方法、「駆ける」「走る」「跳ぶ」スポーツの基本行動とその指導法も正確に解説され、現在も学校教育やスポーツ指導に導入されている。

(第1編 生兵教練、第四編 散兵教練)

○教育制度への関わり

ヨーロッパの教育制度は軍事優先から始まつている。明治政府の軍事改革もこの書物に記載されているプロシアの「歩兵軍ノ区分と編成」を踏襲している。日本の近代化も富国強兵から始まり小、中、大、軍学校の学校制度もこの分類でのヨーロッパ教育の影響を強く受けた教育制度を取り入れている。(第一篇 生兵教練)

○号令用語に

この書物には日本人の誰でも知っている「氣を付け」「休め」「廻れ右」「前へ進め」「全体止まれ」「右へ習え」等の多くの号令が記述されており、これ等は石井の翻訳用語であり、軍艦操練所で創作された「ヨ―ソロ―」等の船舶号令も多くは石井の翻訳号令に基いている。(勝海舟陸軍史)

○議会の運営に 「ただ今から衆議院本会議を開催いたします―」 「示動令ハ発唱スルニ声高ク

明瞭ナルヲ要シ 其尾端ヲ延シ引クベシ」

推測するに博習堂で教育を受けた伊藤博文の帝国議会への提唱ではないだろうか。

○消防団・自衛隊に 基本的な団体行動訓練のすべてが記述されている。

○軍楽隊調連 後の官軍行進曲、及び農兵節の源流となっている。

軍楽隊調連についての記述、(鼓手 吸角手、楽手) 長崎海軍伝習所では太鼓を用いて海兵隊の軍楽隊調連を指導している。(第一編生兵教練書 第四編散兵教練書 附録 合図鼓譜)

これら一連の書物は長州藩を経ては明治新政府の軍制、教育の近代化の推進力として大きく寄与し、この動きは今日も尚継続し伝承されている。

一方旧幕府側にも広く活用され、翻訳校閲の仙台藩大槻盤溪は戊辰戦争東北六藩の総括として明治政府から死刑を宣せられたが、その学才を惜しみ終身禁固幽閉に処せられた。その後許され新政府からの出仕要請を断り以後多くの著作をのこしている。

江川坦庵亡きあと葦山江川家からは石井修三の存在は全く消えている

修三の生家五香家も当時これら史実を既に知っており、しかも黙している。

地域社会及び歴史の町伊豆葦山は源頼朝、北條政子、江川坦庵・反射炉にのみ目を奪われた結果、この様にわが国の近代化の歴史に深く関わった「人物と資料」を全く埋もれさせて来たことは、この書物「歩兵運動軌範」が長州で評価・活用され、結果として倒幕に関わり、明治維新及び日本の近代化に貢献した「人物と書物」として改めて再評されべきであろう。全巻復刻出版刊行の暁には歴史に残る資料として評価されるであろうと確信している。

参考資料 (伝記)

西洋を学び明治を先覚した偉才 蘭学者石井修三の生涯 相原修 著 羽衣出版

駿河・伊豆・相模 郷土資料連絡協議会(公立図書館) 講演資料 平成二三年二月九日

平成二三年二月九日 静岡県駿東郡長泉町竹原三四〇・六 相原修 記

翻訳者 石井修三のプロフィール

長崎海軍伝習所 第一期伝習生 幕臣 江川属生

○文政一二年（一八二九）生（生不祥）→安政四年（一八五七）九月二九日 没 二九歳。

幕末期の幕臣、伊豆葦山代官所手代・蘭書翻訳方、軍艦操練所教授方、蘭学者、諱 信恕
幼名 江川修三、別名 習斉、周斉、など、写真肖像画等は一切残っていない。

一 生い立ち・葦山家臣塾

○伊豆葦山四日町北条郷 江川姓を名乗る唯一の江川代官分家五香家・江川家に生まれる。

○父石井右仲は伊豆の国市浮橋古屋家で育ち、幼名古屋高棟、竹村茂雄穂向屋に国学と歌道を、石井養有（沼津市三津）に医業を学び、北条郷江川家の家伝漢方処方箋五香湯を継ぎ、葦山代官所出仕の漢方医であった。江川本家とは近しい親族とも考えられているが修三が五歳の時に亡くなる。母いさは伊豆の女流歌人菊池袖子の従姉妹であり、歌詠みの家系である。

○葦山代官所家臣塾にて教育を受ける。

代官所出仕につき幕臣の分家を認めない武家諸法度によって父子共に石井姓を名乗る。

葦山代官江川家では家臣の子弟を幼年期から代官所に出仕させ国学、剣術、蘭学等の基礎教育や垣庵公直々の狩猟に同行し銃操訓練を実施している。

蘭学のみならず漢詩にもすぐれた能力を発揮している。

二 蘭学修業・蘭書翻訳方

○弘化四年（一八四七）江川垣庵推挙により江戸蘭学塾坪井信道の日習堂に学ぶ 一九歳

日習堂名簿 習斉 この頃より諱 信恕 信は坪井信道、恕は江川垣庵を意味する。

偶成（ぐうせい）お殿様（江川垣庵公）から江戸へ蘭学留学が告げられた日の心境

遊禽無宿樹 あにほからんやうもむるけいふう 豈 図 蒙 惠 風 せいじゅうにゅうふう ひ 西戎入寇日 ふんごうにんくうにち 粉骨報微功 ふんこつほういこう

習 齊 拝

（意味）

飛びめぐる鳥のように 落ち着いて宿る樹もない私に

思ってもみなかったこと 南風のように暖かいお殿様の恩恵を受けることを

西洋人が日本に攻め来る日には 力の限り努力し

私の僅かな功をもって恩返ししようと思う

（平成二〇年 葦山江川文庫古文書から発見された石井の家臣塾の在籍を示す唯一の資料）

○嘉永二年（一八四九）日習堂終了後 葦山代官所蘭所翻訳方として江戸屋敷に出仕し多くの蘭書を翻訳する。矢田部郷雲 中浜万次郎 鈴藤勇次郎 榎本釜次郎等と共に過す。

葦山代官所手代に任官（同六年）台場築城に参画、大小砲習練所御鉄砲方付手代、教授方。

三 ヘダ号建造・垣庵公の逝去

○安政二年（一八五五）ロシア軍艦ディアナ号沈没につき代船ヘダ号建造のため戸田仮奉行所に
出仕洋式船ヘダ号の建造に従事する。着発弾を開発し、幕府大森打場にて試射会。

○医者として垣庵公に戸田から江戸迄同行し臨終に立ち会う。「江川垣庵公臨終の記」を残す。

坦庵墓地に供養灯籠あり（信恕）

四 長崎留学・軍艦操練所教授方・遭難死

○安政二年（一八五五）長崎海軍伝習所 第一期伝習生として勝海舟と共に長崎に留学造船を学ぶ。長崎海軍伝習所で学んだ洋式訓練は長崎留学前に既に石井によってその教練書は翻訳されている。

○安政四年（一八五七）三月 長崎海軍伝習所終了 我が国最初の海軍士官に任官

江戸築地軍艦操練所 教授方に任官・・・万延元年（一八六〇）咸臨丸太平洋横断渡航は石井の没後であるが軍艦操練所の我が国初めての遠洋航海である。

五 遭難死

○教授方に任官六カ月後の安政四年（一八五七）九月二九日芝新銭座江川屋敷前にて遭難死

戒名 求法院欣入日淨信士。（欣求淨土） 以後葦山からは全く消息は消えている。

没後は徳川幕府世襲の伊豆葦山代官江川家一族の眠る菩提寺葦山本立寺に墓石あり。

○墓碑に刻まれた辞世の七言絶句（修三 二九歳）

らんがくけんきゅうにしじゅうきゅうしゅう なんぞはからんさいしんのめうにぞまらんとは
蘭学研窮廿九秋 何圖忽染采薪憂

そくこんいままきにじゅうせんにむかつてせらんとす もうきよくしんおんいつのよにかむきいん
即今将向重泉去 罔極親恩幾世酬

石井周齊

（意味）蘭学を研究して二十九年、図らずも病を得てしまった。

今この世を去るにあたって親に恩返しは出来なかったけれども、

何時に世にか 酬いようと決心している

六 翻訳本 和蘭国製鉄論について 嘉永二年（一八四九）

この書物は石井が日習堂終了あと葦山代官蘭書翻訳方として最初に取り組んだ翻訳論文であり、オランダのみならずイギリス、フランス、ドイツ、ベギー、ソヴィエツト等

西欧諸国の製鉄全般を論じた科学論文であるが、この時期末だジョン万次郎との出会いも戸田造船のロシア人との出会いもなく我が国の鎖国時代に広くヨーロッパ諸国に目を向け理解し論じた画期的な翻訳作業であった。

前防衛庁戦歴部、対ロシア防衛専門官 北沢法隆氏の石井修三 評

この論文は単なる翻訳ではなく、科学知識・西欧知識をオランダ語で十分に理解し駆使したものであり当時としては一級の知識人であり惜しい人を亡くしたものだ、残念に余りあるものだ。

校閲者 大槻盤溪の略歴

仙台藩儒官 漢学者 名は清崇 仙台藩校養賢堂学頭
享和元年（一八〇二）生く明治十一年（一八七八）歿

一、生い立ち・修業時代

仙台藩医蘭学者大槻玄澤の二男として生まれ、一六才で昌平坂学門所に学ぶ。父玄澤の希望で蘭書翻訳語を当時の学術用語の漢文体に翻訳するために漢学者儒官の道を歩みその子息文彦が国学者とし「言海」の編纂に生涯を尽くし大槻三代を通して我が国の学術用語を完成する。

江川坦庵と同年であり江川塾に入門し砲術を学び、漢学を本業とし砲術を副業とし文武両道の道を志す。

二、漢学者として

本書「歩兵運動軌範」の校閲にあつたつて特に号令用語の日本語訳にこころを砕き、兵卒の号令内容の理解と素早い行動が出来る日本語訳に心を砕いている。

また本書の校閲も横文字国の言葉を縦文字の国語にふさわしい文体に翻訳するよう坦庵公の意向を聞いたただした書き込みもみられる。

三、戊辰戦争の時代

戊辰戦争にあたつて東北一六藩の仙台藩盟主参謀として主戦論を唱え、敗れて戦犯として斬首刑リストに入るもその学才を惜しみ終身禁固刑を受ける。

病によつて刑を許された後新政府に出仕を要請されるが固辞し子息文彦が出仕し「言海」を完成する。

四、著作・思想信条

献芹微衷（けんきんびちゆう） 米利幹議（りけんぎ） 露西亜議（ろしあぎ） 他
海防、陸防、開国論は政治家江川坦庵の主義主張に大きく影響を与えている。

最後に本書の大槻盤溪校閲は石井修三と共に当時としては斬新且つ危険思想であり石井が坦庵亡きあと蕪山から消えていた理由でもあらうとも察される。